

けんか

山中與隆

YAMANAKA TOMOTAKA



土砂降りの中の
ひき逃げ事故

Duo-Yamanka

けんか

山中與隆

目次

けんか

1

編者あとがき

42

けんか

山中與隆

映子は思い切り強く武雄にしがみついた。武雄の固く張り切ったものを深々と受け入れた充足感に感極まって押し殺した声を漏らした。その官能の激しさに武雄の興奮はいやでも高まり、二人は激しく腰

を動かした。武雄はこらえきれなかった。その一瞬を感じて映子は小さく、

「まって」

と言ったが間に合わなかった。映子にも余韻が残つて、二人はほんの少しの間そのままにしていたが、じきに身体を離して、お互い天井を見ながら荒い息をついた。官能が静まってくると、二人の間には官能の嵐が始まる前の空気が流れ出した。映子のアパ

トの時計が刻む音がやけに大きい。日曜日の午前
十時を少し回ったところであつた。

映子は、五年前に女を作つて出て行つた夫と正式
に離婚して、いまは独り者である。四十三才で、長
門市の小さな食料品製造の町工場の事務員をして暮
らしを立てている。仕事はてきぱきとこなし、高校
を出たときからの古顔で、経営者よりしつかりして

いると頼りにされている。体つきは、さすがに中年のずん胴型になり始めているし、腹も少し出てきているが、顔は色気と愛嬌があつて明るいので工員たちに人気がある。

離婚してからは、男の噂が絶えることがなく、実際に男なしでは生きていけないタイプの女であつた。噂では、離婚前から男がいて、離婚の原因も夫の浮気よりもそちらのほうが先ではないかとも囁かれて

いた。そして、町工場からバスで十分のところにあるアパートを借りて住んでいる。このアパートには離婚してから越してきたのだが、引越しの三日後には男が訪ねてきて、泊まつて行ったといった調子である。

武雄は五十三才。隣の三隅町で小さな建設会社を経営している。家には、妻と長男夫婦、それに大学浪人の次男がいる。もう一人東京の私立大学に行つ

ている長女がいて、夏休みなどには帰ってくる。年のわりに精悍な体つきをしていて、腹も出ていないことをひそかに自慢に思っている。妻は、美人顔だが痩せていて、ややぎすぎすした感じで、昔はそうでもなかったが、子供の成長につれて教育熱心になり、色気のないタイプの女になっていた。最近では、武雄の求めに応じることはめつたになく、武雄も諦めているようであった。

武雄が映子を知ったのは、映子の会社の工場増設工事を武雄の会社が請け負うことになって、出入りするようになったのがきっかけであつた。映子が、例によつて明るい調子で武雄と冗談を言い合つたりするうちに、たちまち二人は出来てしまつた。

実は映子には、他に若い愛人がいる。二十五才の独身で、同じ会社の工員である。彼は、旺盛で熟れきつた映子の腕の中で満足を与えられる立場であつ

た。それにひきかえ、武雄はその若い男よりもずつと強靱な肉体をしており、映子は甘えて満足させてもらう立場であつた。映子のこの二重の男関係は二年近く続いている。武雄は若い男のことを知つていた。映子が隠さずに話したのである。武雄は映子の会社に入入りしたので、それがどの男かも知つていた。その若者の名は大輔といつた。

最近映子にとって武雄は、時にうつとうしい存在になるときがあつた。ひよこのように従順で、なにもかも映子の言うなりになつて甘える大輔に比べて、武雄は映子を自分の思い通りにしようとしすぎるのである。初めのうちは、大輔との関係とちようどよいバランスをとっていたが、もともと他人に支配されることに我慢できないタイプの映子は、武雄の肉体的にも精神的にも強引に映子を引き回すやり方に、

嫌気がさしてきた。武雄が奥さんに拒まれて溜まつたもののはけ口として自分を利用していると感じ出したのである。確かに映子は、武雄の鍛えられた肉体に力づくで組み伏せられ、その下で狂喜させられるはするが、結局はすべて武雄の都合、武雄のペースであった。それに比べると、大輔との場合は、映子のペースでことは運ばれる。映子は自分が満足を与えられるよりも、相手に満足を与えることにより大

きな歓びを感じる女なのである。

この日も、映子のアパートに来ると言ったのは武雄の方であつた。武雄からアパートに行くという電話があつたとき、映子は今日のうちにしておかなくてはならないことがたまっているのと断ろうとしたのだが、もうアパートのすぐ近くまできているというので、しかたなく受け入れたのであつた。五分

もしないうちにアパートのチャイムが鳴った。部屋にあがるとすぐ武雄は、

「用事ってなんだ。明日も日曜で休みなんだから、そんなことは明日にすればいいじゃないか」

と相変わらず自分のペースでしかものを考えない。映子は電話のとき口から出まかせを言ったので、慌てたがすぐ思い直して、

「私だってお勤めの身ですから、たまの休みにして

おきたいことくらい山ほどありますわよ。そんなことなんて言わないでほしいわ」

とやや苛立った調子で言い返した。そして、「もう来ているんだから、いいじゃないの。お茶を入れるわ」

と言つて、炊事場に立つた。

映子が入れたお茶をすすりながら武雄は、

「今日は津黄（つおう）の方までドライブしたいと

思つて誘いに來たんだ」

と言つた。映子と武雄の逢引はほとんどこのアパートの中だけに限られていたが、これまでも二、三度ドライブに出かけたことがあつた。その場合もあまり遠くに行くことはなく、早い時間にこのアパートに帰つてきて、情事にふけつてから武雄が帰つていくというパターンであつた。映子は今日も結局はマンネリ化したパターンの一日になつてしまつたと、

内心うんざりしていた。

そんな会話を交わしているときに、またチャイムが鳴った。はじめ映子は宅配便か何かだと思つて立ち上がったが、はつと思ひ当たつた。大輔に今度の休みに来ないかと声をかけてあつたのである。映子は日曜日のつもりで言つたのだが、ひとりよがりであつた。大輔は言われたとおり休みになつたから訪ねてきたのである。映子の予感は当たつていた。戸

を開けるとそこに大輔が屈託のない顔で、ケーキでも買ってきたのか紙袋をぶら下げて立っている。映子は、入ってきそうにする大輔を押し戻して、戸を閉めて外で、

「いまだめなの。親戚の人が深刻な話で相談に来ているの。悪いけど明日にしてくれない」と小声の早口で言った。大輔は、「いいですよ、じゃこれ」

と言つて紙袋を映子に渡して、驚くほど素直に帰つていった。映子は、これから女を抱こうとして、大輔の場合抱かれにと言つた方が正しいが、それを断られて何の抵抗もなくあつさり引き下がるところが、便利ではあつたが、不思議な性格だとも思うのだった。

映子は部屋に戻つて、武雄にはありのまま言つた、「大輔よ。時々来るの。知ってるわよね。素直な子

でね。人が来ているって言ったらあつさり帰っていったわ」

武雄は、内心愉快ではなかつたが、腹の太いところを見せようとして、

「俺が後だつたら、こっちが追い返されるところだつたな。間一髪セーフってところか」

と笑って見せた。映子は武雄のその笑いには無理が潜んでいることを感じとつた。武雄は、

「おい、また誰か来ないうちに出かけよう。用意しろよ」

と映子を促した。映子はあまり気が進まなかつたが、一度言い出したらそのとおりにしないとおさまらない武雄の性格を知り尽くしているので、しぶしぶ出かけることにした。しかし、着替えに立ち上がりながらも、

「今日は昼から大雨って言ってなかつた」

となおも中止の理由を探した。

「雨が降っても、私の車には屋根があります」と武雄は相手にしない。映子は仕方なく、隣の部屋に着替えに入った。五分もしないうちに、武雄が映子の着替えている部屋に入ってきた。

「まだよ」

と映子は言った。映子は下着姿で洋服を選んでいた。武雄はその映子を後ろから羽交い絞めにした。映子

は一瞬、いつもの調子で始まったと嫌悪感が身体を通り抜けたが、武雄の技巧に屈して、官能の渦の中に抵抗できずに巻き込まれていったのである。

お互い天井を見ながら荒い息をついた。官能が静まってくると、二人の間には官能の嵐が始まる前の空気が流れ出した。映子のアパートの時計が刻む音がやけに大きい。日曜日の午前十時を少し回ったと

ころである。

映子に明日にしてくれと言われた大輔は、アパートの前に車を止めたとき、先に一台停まっていたのを思い出した。あれが親戚の人の車かと思った。大輔は自分の車に乗り込もうとして、前に停まっている車を見た。どこか見覚えがある車のような気がした。乗りかけたドアをそのままに、前の車に近づい

てみた。後ろの座席に工事用のヘルメットが転がっており、それには大輔たちの会社の増築をしたときに、毎日のように来ていた建設会社の社名が書いてあった。大輔ははじめ、映子の親戚の人はあの建設会社に勤めているのかと思ったが、すぐにそれはその建設会社の社長の車であることを思い出した。そして、工事中現場でもその社長が映子と冗談を言つて笑いあっている場面を、今見ているかのように

つきりと思い出した。親戚なんかじゃない。大輔はこれまで経験したことのないような激しい嫉妬心が体中に沸き起こるのを感じた。すぐに映子の部屋に戻ろうとしたが思いとどまった。思いとどまったというより、行って何をしたらいいのかわからなかった。大輔は、とりあえず自分の車に戻って、エンジンをかけゆつくりと車を次の曲がり角まで動かした。社長の車から直接見えないところに停めて待った。

車に乗り込む音を聞き逃すまいとして窓を開けた。

一時間以上待ったところ、大きな声で言い合いながら映子と男が出てきた。大輔は、車のドアの音がしないようにして、角まで行って様子をうかがった。

映子は、細かい柄のワンピースに、白いハイヒール、それに日は照っていないが真っ白い大きな帽子をかぶっていた。いかにも自然の中にドライブに行くといったいでたちである。そして、男はやはり建設会

社の社長であることを大輔は確認した。

「ほら、空が真っ暗じゃないの」

「まあ、心配しなくても大丈夫さ。こんな近くにい
いところがあるのでびっくりすると思うよ」

「雨の中じゃあ、いいも悪いもないんじゃない」
そして映子は少し声を低めて、

「今日はもうすんだからいいんじゃないの」
と言った。すぐ近くの路地にいる大輔にはすべて聞

こえてきた。

「そんなことだけでお前と付き合ってるわけじゃないだろー」

と武雄は映子の言葉に軽蔑を読み取って、不機嫌そうな声で言った。言い合いながらも二人は車に乗り込んだ。

大輔には、何となく気乗りのしない映子を、社長が強引に連れ出したように見えた。出来ることなら

映画のヒーローのように、二人の前に出て行って、男を殴り倒して映子を救い出すところを想像したが、実際にはそんな勇氣も力もなかった。大輔は、社長の車の後をつけた。社長達の車は、国道をしばらく走った後油谷湾沿いの岬に通じる道を走った。走り始めるとすぐ、大粒の雨が降り出した。あまり道幅は広くないが、ほとんど車は通っていないので、社長の車はかなりのスピードで走っていた。大輔は遅

れがちであつたが、他に車が通らないので見逃すこととはなかつた。見通しがいいところに出ると、はるか前方を走る社長の車が見えるのだつた。

棚田の広がる中を走るころには、土砂降りになつていた。武雄と映子の車の中でも外の土砂降りに負けないほどの喧嘩になつていた。

「私降りるわ」

「ばか、こんなところで、土砂降りでどうする。も

うすぐ津黄だから、そこから古市に出たほうが早いから」

「いいから降ろして」

「ここじゃ無理じゃないか」

「とめて」

映子はヒステリックに叫んだ。津黄峠のカーブを曲がったところで車は急停車して、日傘のような小さな傘とハンドバックを持った映子は車から降りて、

思い切りドアを閉めた。車はすぐに走り去った。映子は土砂降りの中にしばらく呆然と立っていた。小さな傘はないのと同じで、たちまちずぶ濡れになった。前に進むか、後戻りするのかわ映子には何の考えもわからず、一、二歩行ったり来たりした。そのとき、土砂降りについてヘッドライトをつけてカーブを曲がってきた車が、道の真中にいる映子を見て急ブレーキを踏んだが、映子ははね飛ばされて、道路わき

の斜面に転がった。

大輔は、顔を見たわけではないが、フロントガラスをこするように飛んでいった洋服の柄で、自分のはねたのが映子であることがわかった。大輔は、われを失って車の中にじっと坐っていたが、やがてそのまま走り去った。徐々にスピードを上げ、ついには猛スピードでさして広くない雨の道を走りつづけた。珍しく走ってきた対向車を際どくかわした。

武雄は、こんな天気の中でなんて馬鹿な運転をするやつだと、腹が立った。こっちが気をつけて走っていたからよかったが、スピードが出ていたら正面衝突じゃないか。武雄は、喧嘩の勢いで映子が降りるに任せたが、気になって戻ってきたのである。

さつき映子が降りたところまで来たが、誰もいない。武雄は道にガラスの破片が散らばっているのに気付いて、雨の中に傘も持たずに降りた。ガラスの

破片は、車のランプの割れたものらしい。急に胸騒ぎがして、あたりを見回した。道路わきの斜面が始まるあたりに、白い帽子が濡れ雑巾のようになって落ちていた。そして斜面の十メートルくらい下に映子がうつ伏せに倒れていた。武雄はそこまで降りて映子を抱き起こしたが、真っ青な顔で、目を閉じている。武雄は、映子をそこにそつと置いて車に帰り、携帯電話で百十番した。

「ひき逃げらしい。被害者はまだ死んでいないかもしれない」

と、津黄峠のカーブを過ぎたところだということも知らせた。

十五分くらいでパトカーと、救急車が来た。救急車は映子を収容してすぐにどこかの救急病院へ向かった。救急隊員に担ぎ上げられた映子は、足も腕もぐにやぐにやになっっているようだった。血は見えない

かつたが、泥がついているのか打撲のあざなのか、剥き出しの部分の方々が黒ずんでいた。

武雄は、通りがかりの者と言ったので、発見したときの様子などをパトカーにいろいろ訊かれた。警察はそれとなく武雄の車を調べたが、特に衝撃で受けた傷らしいものもないと見て、通報の礼を言い連絡先を聞いてから武雄を帰した。

大輔はすぐにひき逃げ犯として捕まった。取調べに對して、映子との関係がばれるのを恐れて、映子が社長の車に乗っていたことなど一切言わず、ただ、ムシヤクシヤして車を走らせていたら、前も見えなような土砂降りの中で、カーブを曲がったところの道の真中に女の人が立っていて、ブレーキをかけたが間に合わなかった。はねたことはわかったが、怖くなつて逃げたとだけ言つた。

武雄は数日後、映子の会社を訪ねて、ニュースで知ったのだが大変でしたねと事故を見舞って、映子宛の香典を事務員にことづけた。

映子の会社の社長が出てきて、武雄に、

「ご丁寧にすみません。いやー、なんでまたうちの社員が、同じうちのを轢き殺すことになんかなってしまったのか訳がわかりませんわー」と飛んだ災難だという風に話した。

「いやね、二人がおかしな関係かとも考えてみたんだけど、そんなこともないらしいし、だいたい同じ車に乗つたらんかったわけじゃからね。警察にも事故起こした子のことをいろいろ訊かれとるんですが、私にもわかりませんわ」

武雄は、

「どうも、社長さんにとっては二重に大変な災難です。ね。人材としてももったいないことでしたね」

としおらしく言う。社長も諦め顔で、

「ま、かなりの発展家と言うことは聞いておりましたから、何かあつたんでしようね。仕方ないですわ」といって、茶をすすった。

「もしはねた後すぐに救急車呼んでたら、命は助かってたかもしれんて言つてました。あいつも、逃げたりしなけりやねー。でも人を轢いて、誰にも見られていなかったら、逃げたくなるでしょうなー」

(完)

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 ≪お蓮・勘兵衛 悲恋の墓≫

第二話 ≪緑のトンネルで≫

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

けんか

2022年7月30日：初版発行

著者：山中與隆

編集発行：山中伶子

表紙素材元：

www.ac-illust.com

タイトル：強風と雨・壊れた傘と女性
のシルエット

作者：青い星さん

イラストのID: 22783341

<https://www.photo-AC.com>

土砂降りの雨

作者：Inushita

写真のID:1679163

© Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
